



# ハルナガ・アイザクソン 「文献学とテキスト批判」和訳

著者	小坂 有弘, 横山 啓人
雑誌名	宗教学・比較思想学論集
巻	20
ページ	69-77
発行年	2019-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00161442">http://hdl.handle.net/2241/00161442</a>

# ハルナガ・アイザクソン「文献学とテキスト批判」

## 和訳

小坂 有弘（訳）・横山 啓人（訳）

### 凡例

1. 本稿は、Harunaga Isaacson 教授（ハンブルク大学 / 筑波大学）による演習および講義の概要 “Philology and Textual Criticism” の和訳である。本稿の内容は2018年8月現在における暫定的なものであり、Isaacson 教授による今後の改訂が見込まれる。本稿の英語原文については、筑波大学の「海外教育研究ユニット招致プログラム」（IERLP）Web サイト（<https://ierlp.jinsha.tsukuba.ac.jp>）内の記事を参照されたい。
2. 原文中の（ ）による補足や ‘ ’、ダッシュについては訳文においてもそのまま表記する。また、’は「 」で表記し、斜体字には傍点を付す。
3. 必要に応じて（ ）で原文となる英語を示す。
4. [ ] は訳者による補足を示す。

## 文献学とテキスト批判<sup>1</sup>

### 文献学：諸々の定義とその重要性

文献学はテキスト研究に限定されるものではない。実際のところ、テキストのみを効果的に研究することは不可能である。人は常に思考（thought）と精神（mind）を理解しようとしているのであり、すなわちそれは人がテキストだけではなく、文化ないし文化的背景（cultural context）を研究しているということである（歴史上の少数の言語学者は例外と言えるかもしれない—ちなみに、ある者は彼らを文献学者と呼ぶかもしれないが、私の好む定義によれば彼らは文献学者ではない。その[定義]は以下に述べる）。私が好む文献学の定義、それは、とっつきやすいもの（catchy）とは言えないが、次のようなものである。[すなわち] テキストないし筆記された証拠（written evidence）（それらは可能な限り慎重かつ正確に読解され、研究される）を活用した、文化研究（study of culture）

---

<sup>1</sup> 2017-18年の冬学期にハンブルク大学で行われた文献学とテキスト批判に関する演習と、2018年2月に筑波大学で行われた同じトピックに関する短い講義の概要である。この概要は、元となる演習や講義では示されなかったいくつかの新たな点や記述を含む。

である。このように慎重かつ正確に読解するためには、言語やそのニュアンスだけでなく、文化的背景に関する卓越した学識、あるいは少なくとも絶えず進歩していく学識を獲得しようと努力することが必要である。

さらに三つの定義をあげることができる（それらはいずれも、少なくとも部分的には重要である）。

1. 「文献学はゆっくりと読む技術である」<sup>2</sup>。[この定義は—その典拠として] 多くの者に帰せられて—しばしば引用されるものであり、とっつきやすいものに違いないし、利点も持ち合わせている。ただ、注意すべきは、文献学者は素早く読むこともできないしなければならないということである！
2. 「文献学は可能性がある (possible) (あるいはただ可能性のあるに過ぎない) ものから蓋然的なもの (probable) を区別するための技術である」。例えば、文法規則は我々が (言語学的に) 不可能なものから可能性のあるものを識別するのを補助する。しかし、文法規則 (に関する知識) のみが [人を] 文献学者たらしめるのではない。文献上の問題や、文献を主な証拠とする文化史上の問題に対しては、極めて多くの解決策が可能であるが、これらの可能な解決策の中でどれがなぜ最も蓋然性が高いものであるのかをある者が高い頻度で優れた判断力をもって述べられる場合、その者は良い文献学者だと称されうるのである。
3. 「文献学は統御された統合失調症である」。他の人間、すなわち異なった時代の、当然ながら異なった文化的背景をもつ人間になることを、可能な限りで習得する必要がある。もっとも、人は自らの統合失調症を常によく統御されたものにしなければならぬ！

ある者がある文化のテキストないし文献証拠という実体的な物体 (substantial body) を手にすることができ、かつその文化を直接経験すること (living access) ができない場合には、文献学が必要不可欠となる。我々は文化研究を以下の三つの段階に大別することができる。すなわち、「考古学的段階」ここでは我々はテキスト本体 (body of text) を利用することはできない。「文献学的段階」ここでは我々はテキスト本体を利用することができる。この段階においては、テキストを正確に読む能力が [文化を研究する上で] もっとも重要となる。「文化人類学的段階」ここでは我々はテキストだけでなく生きた文化を利用することができる。以上の区分は、私が「異星人のシナリオ」と呼んでいる思考実験を考察することによって、より鮮明なものとなりえ、よりはっきりと理解される。

異星人の宇宙船が地球に不時着するのを想像してみよう。異星人たちは不幸にも全員死んでしまうが、彼らの船は無事である。宇宙生物についての科学がたちまち起こる。それは一世紀ほどで基本的には考古学的なものとなる。専門家たちは船内にあった異星

<sup>2</sup> ニーチェの『曙光 (Morgenröte)』(1881 年) に既に見られる。

人の遺体や物品などの遺物をもとに異星人の文化について推測を行う。さまざまな学派が現れる。ある物品を、ある者たちは宗教儀式において用いられたものだど解釈し、他の者たちは娯楽のために用いられたものだど解釈する。ある芸術作品のようなものを、ある者たちは宗教的なものだとし、他の者たちはポルノグラフィだとする。ある者たちは、異星人たちは強引に人類を彼らの信仰に転向させることを目的としたある種の宗教的狂信者であったと考え、他の人たちは、彼らは純粋に交易に関心があったと考える、等々。ついにロゼッタストーン（傍受した交信）によって我々が異星人の（諸）言語を学んだり無数の「本」（宇宙船内の数百の小さな記憶装置に記録されたもの。初期の宇宙生物学者たちは、ある種のサイコロ状の玩具としてギャンブルに用いられたものかもしれないと考えた）を「読む」ことができるようになったとき、宇宙生物学の本質は根底から転換する。今や最も重要な証拠物品（the most important body of evidence）はこれら無数のテキストである。それらは数千年に渡る異星人の文化を包摂した、すなわち詩歌、哲学、科学的研究等々を内包する。この時我々は宇宙生物学における文献学の段階に突入する。五百年の後、第二の異星人の船が飛来し、再びすべてが転換する。十年のうちに異星人との交易の居留地が地球に建てられる。続く五十年のうちに、一部の人類は、日常的な交流によって、あるいは場合によっては異星人の居留地に住むことによって、密な親交や他の関係を築き、彼らの文化をよく理解する。その結果、文化面では人類的であると同じくらい異星人的になる。我々は人類学の段階に突入している。テキストを厳密にかつ注意深く「扱う」優れた読者にならずとも、異星人の文化を知り、異星人であるも同然となりうる。

第三の段階においては、十分慎重に（あるいは「ゆっくりと」）読解を行うことは（時にはそれが有効となる時もあるかもしれないが！）不可欠なことではない。というのも、その代わりに、ただある文化の中で生活するだけで、その文化を深くまた密に知ることが可能になるのである<sup>3</sup>。なぜ文献学ないし正確にテキストを扱う研究領域（accurate textual scholarship）が第二の段階において不可欠となるのかというと、生きた文化の利用の欠如、すなわち、ある文化の当事者との実質的な相互作用から生じる、「緻密」で豊かな理解の欠如を部分的ながら補うことができる最良の方法が文献学だからである。

## テキスト批判：テキストに批判的であること（being text-critical）

テキスト批判（textual criticism/text-critical）とは、少なくとも私のこの語の使用法では、テキストの諸版（text-versions）に対して批判的態度をもって臨むということに尽きる。このことは、いかなるテキストの諸版も（たとえそれが自筆のものであったとしても）無批判に権威とはみなさないという単純な真理を自覚することと同義である。簡単に言えば、著者の自筆でさえも何らかの誤りを含みうるということである。テキストの諸版

<sup>3</sup> しかし、[以下のことには] 注意すべきである。この第三段階においてさえも、同時代の異星人文化ではなくその複合的な歴史（それは広義には文化的、文学的、宗教的な歴史を含む）を研究し理解しようと願う者たちにとっては、宇宙生物学の第二段階に関する文献学的技術は依然不可欠である。そのような研究においては、文献学と文化史[学]の学派をそれぞれ独立に発展させてきた人間と異星人の学者らが効果的に相互作用を与え合うことがいまや可能となるのである。

(これは後の章で提示される術語のうちではBにあたる)は、つねに自らの知識、理解(それはその文化的背景に対する知識、理解を含む)に照らして批判的に検証されなければならない。

### 批判的校訂版 (critical edition) : 主観性と三つの段階

批判的校訂版とは、例えば翻刻 (transcription) や転写版 (diplomatic edition) とは異なり、極めて主観的なものである(もちろん翻刻や転写版さえも完全に主観性を廃しているわけではない) —それはある著作のある版に関する校訂者の「仮説」である。大抵の場合[ここで言うある版は] 著者自身の版 (authorial version)、つまり実質的には「理念上の (ideal)」著作(私が導入した術語で言えばAに当たる)であるが、そうでなければいけないというわけではない。ここで言うAとは言葉の形態(あるいは言葉で表現された思考の形態と言ってもよい)をとるものであり、その著作のあらゆるテキスト諸版からは区別される。また、ここで言うテキスト諸版とは私がBと呼ぶものであり、私がCと呼ぶ写本や木版印刷、印刷版などの物理的なもの (physical object) において伝達される。この三種の段階の違いは、例えば Edmund Spenser のソネット連作 Amoretti の第一ソネット、もしくはそのソネットの最後の二行である

Leaves, lines, and rymes, seeke her to please alone,  
whom, if ye please, I care for other none.

を思い返すことで記憶されるだろう。ここで leaves とは物理的なものとしてのCであり、lines とは leaves に書かれたものであり、書かれることによって、一連の慣習的な記号 (conventional symbol) (すなわち、表記体系 (writing-system)) を通じて言語化され、テキスト版としてのBが我々に与えられる。rymes とは音としての詩であり<sup>4</sup>、(もしAが言語すなわち音 (sound/sonic) で構成された著作と見なされるのであるならば) ここで言う詩がAである<sup>5</sup>。より物理的 (physical) ないし物質的 (material) なものからより物理的/物質的でないものへと進展していることに留意せよ。また、Cが特別な価値をもつのはBに基づいてこそであり、Bが特別な価値をもつのはAに基づいてこそである(そして、思考であるところのA1に基づいて、言語的な形態をもった「理念上の」著作であるA2が特別な価値を持つ)ということにも留意せよ。

批判的校訂版が主観的なものだということ(校訂者はどの語を印刷すべきかの選択をしており、[批判的校訂版は] 必ず校訂者の主観的判断の結果ないし現れである)は欠点ではなく、批判的校訂版の作成を企図することが「非科学的」だということを意味するものでもない。逆に、それは科学あるいは学問の最も重要な部分の一つ、すなわち仮

<sup>4</sup> 近代英語の 'rymes' である。しかし、ここでの意味は現代の語法におけるものとは異なることに留意せよ。

<sup>5</sup> ちなみに、Spenser による同じ連作の第二ソネット ('Unquiet thought') は詩の中に表現されている思想に関するものであるが、もしAが思考から構成された著作だと考えられるのであれば、ここで言う詩はAに近いものとみなすことができる。

説の形成ないし生成である。批判的校訂版の価値は、それがあある著作を深く研究した人物の仮説を表すというまさにこの点にある。（この価値はもちろん校訂者の習熟度に依存する。もし校訂者が十分な研究を行っておらず、彼ないし彼女の仮説が十分な知識を根拠としていないならば、それがもたらす利益と価値も乏しいものとなるだろう）。人は、ある著作の写本が一つであるか複数であるか、その写本が良いか悪いかに関わらず、批判的校訂版を作成することができる。（もちろん、すくなくとも非常に良い写本が一つあるならば、仮説はより確実なものとなるだろうし、写本が（すべて）非常に悪いものであるならば、仮説の確実性は下がるだろう）。批判的校訂版という仮説が基づく証拠は、単なる写本の読み以上のものから構成されている。（それはその著作ないしその著者のもつ文化的背景に関する、校訂者のすべての知識を含んでいる）。批判的校訂版は仮説であるため、決定版と呼ばれるような批判的校訂版は存在しない（例えば一さらなる写本「が見つかったりする」ように一新たな証拠が発見されることは常にありうることであり、たとえそのような発見がなかったとしてもある人が何らかの方法で過去の仮説よりも良いものを考案することは常にありうることである）。

批判的校訂版は校訂者の（願わくば深い）研究に基づく判断（judgement）ないし理解（understanding）を反映した仮説である。したがって、あるテキストを批判的に校訂する方法を、そのテキストやそのテキストがもつ文化的背景を深く研究することなしに追求しようとするのは無益である。例えば、数学的あるいは機械的に（algorithmically）写本の系統樹（stemma）を構築することや、その系統樹からテキストを構築することが可能であると考えすることは無意味であり、また非現実的（実際その通りである！）である。文化的背景の知識との関連を無視したいかなる校訂の「方法」も十全なものとはなり得ない。良い（批判的）校訂版は理解を必要とする。したがってコンピュータは、依然として理解する能力をまったく欠いているため（極めて限定された範囲における、特定の状況では、理解をシミュレートすることも可能ではあるが）、校訂を行うことはできない。たとえ仮に理解を欠いた校訂版を作成することが可能であったとしても、そこにどんな意義があるのだろうかとは私は疑問に思う。なぜなら人文学の本質と目標とは理解に他ならないのであるから。

## 系統樹（stemma）；系統樹的校訂

系統樹とは端的に言えばテキスト諸版の（すなわち B のであって、写本、つまり C のではないことに留意せよ）関係性に関するある種の仮説の図式的表現である。このことがはっきりと理解されるとき、例えば「批判校訂版は系統樹を伴う校訂版である」という主張は、愚かとまでは言わずとも不合理だとみなされるはずである。系統樹ないし系統樹的仮説の構築は、一般に考えられているよりも（とても）多くの問題を含んでいる。

（そして、私の経験では、サンスクリットのテキスト版において提示されたかなりの割合の系統樹は批判的吟味に耐えないものである）。なぜなら、

1. 系統樹構築の主たる方法である異同法（common-error method）は、しばしば歴史的

事実に当てはまらないいくつかの前提に基づく<sup>6</sup>。これらは、常に一つの原本となるテキスト版を変更せずに筆写することを筆写者は試みたという前提を含んでいる。

2. 系統樹構築は「三つのC」すなわち Contamination・Correction・Convergence によって妨げられる。
3. ほとんど理想的な状況下でさえ、通例、根拠を説明できるような系統樹的仮説が複数存在する。
4. 現存しているものより多くの写本が過去に存在していたような場合には「不完全なジグソー問題 (incomplete-jigsaw problem)」があり、このことがほぼ確実に多くの系統樹的仮説を歴史的に誤ったものにするだけでなく誤解を招くものにする。

系統樹構築には Joseph Bédier の 'silva portentosa' の議論を含む他の問題も存在する。しかし、これらの他の問題の大半は、私の見解では、上記の1から4までのものほど深刻ではない (付言すれば、実際のところ、1と2と3には重複する部分があることを認めざるをえない)。

ある系統樹的仮説に基づく批判的テキストの構築を自動化することは不可能である。

(「最良の」ケースでは、三本の枝の中の二本の一致が(準)祖本の読みだと見込まれるものを提供すると主張できるが、これは蓋然性に他ならず、確実性ではない)。いかなる場合でも、系統樹の「議論」(三本の枝のうちの二本の一致など)は決して文化的文脈/蓋然性に優先せず、必要に応じてそれらによって優先されなければならない(換言すれば、系統樹の議論のみを根拠に読みを採用するべきではない。それは文化的ないし文脈的に妥当でなければならない)。

## 「最良のテキスト (best-text)」という方法

いわゆる「最良のテキスト」という方法が、もし「最良の写本」のある読みを、その読みが不可能な場合を除いて選びつづけることであるとするならば、A.E. Housman がいくつかの場所で指摘したように、深刻な欠陥をもつものとなる。例えば [Housman は以下のように言っている]「偶然性と一般的な自然の成り行きによって、写本のある読みが可能である場合は常にその読みが正しいものとなり、写本のある読みが誤っている場合は常にその読みが不可能となるが、そのようなことが起こることはない。そのようなことが起こるには神の介入が必要である」<sup>7</sup>。もし「最良の写本」の読みを、その読みが

<sup>6</sup> 伝承している作品と同じ文化に自身が属すると考えなかった中世キリスト教の筆写者による古典 (ギリシアやラテンの) テキストの伝播においては、それらのことはいくらか高い頻度で真実でありうる。

<sup>7</sup> Manilius 著『Astronomicon』第一巻の Housman 版の序文より。また、例えば Juvenal の風刺文学の Housman 版の序文も参照せよ。

単に可能であるだけでなく蓋然的あるいはもっともらしいものである、そのような場合に限って選びつづけるということだとするならば、「最良のテキスト」という方法は、理論的ないし理想的には「折衷主義的 (eclectic)」方法へと収斂していくはずである。

(にもかかわらず、「折衷主義的」方法は「最良のテキスト」という方法よりも、いくつかの理由、特に人間の心理に関連した理由によって優先されるべきものである)。

「最良の写本」を決定することの本当の効用は、‘Housman’s stretcher’と私が呼ぶところのもの（ここで私は Juvenal の Housman 版の序文の、ある文に言及しているのであるが）を獲得するためである。以上については『クローン実験』とその含意するもの；テキスト批判の本質 (*The ‘clone experiment’ and its implications; the essence of textual criticism*) の節を参照せよ。

## Lectio difficilior : テキスト批判の原理

‘lectio difficilior’ [すなわち「より難しい読みがより良い」] は幾分危険な「原理」であり、用心することなしには適用できない。(「難しさ (difficulty)」とは単純ないし簡単な概念ではなく、また「難しさ」はその極限においては「不可能さ (impossibility)」となるはずである。しかし、不可能な読みが「より確実 (stronger)」だというのは不合理である)。テキスト間の異同 (textual variation) は意識的な改変 (change) ないし改案 (innovation) の結果であって無作為で無意識的なものではないという確度が高い場合に限り、[‘lectio difficilior’] は有効なものとなりうる。これについて別の言い方をすれば、もしそのバリエーションが、例えば古文書学的に類似した記号の誤読の結果であることが極めてもっともらしければ、単純に‘lectio difficilior’に訴えることはできない。

‘lectio difficilior’は、それが（正しく適用ないし行使された場合に）有するあらゆる妥当性を、実際のところ唯一の本当に信頼できるテキスト批判の「原理」である根本的「原理」から導き出す。この（時として「遺伝的原理」と呼ばれる）原理は例えば以下のように述べられうる。すなわち「その読みが原型的なものだと最も高い確度で見込まれるのは、それが現存するあらゆる読みの起源として極めてもっともらしく仮定されうる場合である」と。換言すれば、読みの展開に関する対立仮説を比較する必要がある、そして、もしある方向への展開が他の方向へのものよりもっともらしいものであれば、その仮説は当然優先されるべきである—これが我々に最も蓋然性の高い原型的な読みを「与える」のである。

## 「クローン実験」とそれが含意するもの；テキスト批判の本質

「クローン実験」とは以下の思考実験のことである。次のように想像してみよう。優れた学者たちのクローンを（ここで「優れている」とは、長期的に、また深く研究を行っているという点においてである）彼らの記憶の複製をも含めて作る。結果として、「全く同一の」研究者らのグループが二つもたらされたことになる。それから、一つのグループにはある著作の伝承に関する参照可能な全ての証拠（それには写本それ自体、ないしそのコピーも含む）を与え、一方、他のグループには先の写本に現存している読



みだけを与え、それ以上の情報は（現存する写本の数がいくつかという情報さえも）与えない。さて、我々はどのグループがどのような理由で優れたテキスト校訂を行いうるのかを考えてみたくなる。

先述の箇所ですでに要約した観点からすると、直感に反して、情報が限られていたグループの方がより良い成果をあげることもありうるといまや理解できるはずである。というのも、より多くの情報を持っていたグループは、例えば、ある種の系統樹的分析を適用するかもしれない、その分析によって誤った結論に導かれるかもしれないからである。一方、情報が限られていたグループは、テキスト批判において実上一唯一の、とは言えないまでも一最も重要なこと、つまり理解（あるいは複数の読みを評価するための「判断力」）を用いることに集中せざるをえないのである。

しかし、「クローン実験」においてより多くの情報を持っていたグループが、もし系統樹的分析（あるいは他の何らかの「方法」）によって誤った結論に導かれるのを避けるならば、そしてもしテキスト批判の本質を要約した次の手順に基本的に従うならば、彼らは「情報の限られたグループ」よりも良い成果をあげるであろう。私の見解では、その手順とは、私の理解する限り、Housman の見解と大体のところ（彼は自身の見解を要約してはいないのだが）一致し、またそれは私が最高のテキスト批判家とみなす何人かの学者の見解とも一致する。

1. 著者の思考ないし精神を理解すべし。もしこれを完璧に（実際のところそれは不可能であるが）実行するならば、それだけで十分である。この段階ないし局面を「著者の語彙の使用法を理解すること」と呼ぶこともできる。
2. テキスト間の異同がいかんにして展開したかを理解すべし。もし1によってあるテキストを構築することができない場合、この2によってそのテキストを「逆行分析」(reverse-engineer) することができるようになる。この段階ないし局面を「筆者の言語の使用法を理解すること」と呼ぶこともできる。これはその著作が書かれて以降の文化史の知識と理解を必要とするため、ある意味で1と同等ないしそれ以上のものが要求される。
3. 上記の1と2は實際上、しばしば完全に分離されるのではなく二つそろって効果を発揮するものである (cf. *Raghuvamśa* 3.25 における *yad āha/uvāca* の例)<sup>8</sup>。もしこの1と2によって問題が解決されない場合、我々は、Housman がそのような場合には「判断力は無力となる (the judgement is helpless)」と言うところの状況にある。この場合、我々には「(気は進まないが) Housman's stretcher に身を委ねる」より他に、より良い可能性はない。[Housman's stretcher とは、] すなわち、全ての写本の批判的検討によって、他の写本よりも正しい場合が統計上多いと明らかになった写本の読みに従うことである。

<sup>8</sup> この例はこの演習と講義において手短かに検討したが、詳細な検討については Goodall 2001 (ZDMG 第151巻所収) を参照すること。

よい批判校訂版を作成することは自分を極端に過小評価すること（これは我々を保守的な態度や多少なりとも機械的な手法へと向かわせる）や過大評価することとを避けることであると説明することもできる。自己を過小評価するということは、実際のところ我々が初心者のうちは一般的なことであり、健全でもある。しかし、一般的かつ健全に学者として成長することで次第に自信が（直線的にはないが）増すものである。人は過大評価に対し注意しなければならない（すなわち文献学とは「統御された統合失調症」であり、もしある者が自身の研究している著者の精神を完全に理解したと信じ始めている場合、その者は自己を過大評価しているのであって、これはもはや統御されることのない統合失調症である）。

## 結論

あらゆる人の判断は誤りうるものではあるが（なぜなら、あらゆる者一少なくとも完全に悟りを開いていないあらゆる者一には限界があるのだから）、根本的かつ究極的には我々の判断（あるいは代わりに我々の精神と言うこともできよう）以外には我々が信頼する（できる）ものは何もないということに遅かれ早かれ気づく必要がある<sup>9</sup>。このことはテキスト批判における真理であり、学問一般における真理であり、そして実に人間としての生における真理である（また、おそらく、人間以外の有情の生においても真理である）。

（こさか・ありひろ 筑波大学人文社会科学研究科 哲学・思想専攻）  
（よこやま・あきと 筑波大学人文社会科学研究科 哲学・思想専攻）

---

<sup>9</sup> これについては Housman の Juvenal の校訂版における序文の一部を参照。この序文を演習と講義の間に読んで議論する時間が私にはなかった。